
リアル★スター

あげは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアル★スター

【Nコード】

N9044Y

【作者名】

あげは

【あらすじ】

芸能人に関わってはいけない。そんな変な決まり事のある家に育った麻里亜。それなのに、人気俳優と出会ってしまい…！？以前、途中まで別のサイトで書いていたのですが、こちらで完結まで頑張ってみたいと思います。

運命の土曜日

いつもと同じかと思っていた土曜日。
変調は突然やってきた。

カランコロンと、玄関のベルの音が鳴る。
いつもなら、すぐに「いらっしやいませ〜」と従業員の声がかかる
のに、今日はその前に店内がザワついた。

「ねえ、もしかして……!?!?」

「嘘……!?!」

従業員もお客さんも、皆が口ぐちに何かを言っている。

……何?

あたしはテーブルを拭く手を止めて、顔をあげた。

あたしの名前は佐藤^{さとう} 麻里亜^{まりあ}。

カフェ BUTTERFLY でバイトする高校3年生。

普通の……

ううん、ちょっと普通じゃない高校生。

まあ、その話はおいおいするとして……。

うちのカフェは女性に人気で、店内の9割が女性。
そのほとんどのお客さんが騒いでるって……一体、何事!?

お客さんのヒソヒソ声に囲まれながら、あたしはお客さんたちの視線の先を見た。

それは店内の入口付近。
今、入ってきたお客さんたちだ。

男が3人。

なぜか動かない他の店員の代わりに、店長が慌てて玄関に行って、席に案内するところだ。

女性客が多くて男性客が目立つ店だけど、こんなに騒がれることは初めてで、わたしは首をかしげた。

……イケメンなのかな？

あたしの位置からはあのお客さん達の後ろ姿しか見えないけども、理由としてはそれが妥当な気はする。

そうだとっても、店内中の女が反応してるのは、ちょっと異様だよね……？

あたしは席に座る男たちをぼんやりと眺めていた。
すると、「佐藤さん」と店長に呼ばれて、我に返った。

「はい？」

手招きされて、バックヤードへ向かった。

「なんですか、店長？」

店長はおそろしいほどのニコニコ笑顔でわたしを待っていた。
接客業なんだから、いつも笑顔は当たり前。
時には作り笑顔と感じてしまうほどの120%全開の笑顔にも見慣れてる。

でも、この笑顔は……200%全開？
怖いくらい不気味で、あたしの笑顔も引きつってしまふ。

「悪いんだけどさ」

「はい」

「今、入ってきたお客様のテーブルには佐藤さんがついて」
「は!？」

あたしは目を見開いて、大きく聞き返してしまった。

この店はテーブルごとに担当が決まっていて、あたしはあのテーブルの担当じゃない。

あそこは恵美^{えみ}さんが担当だったはずだ。

そう思って、恵美さんを視界から探したら――

彼女はぼうっと一点を見つめてた。

熱にうなされたような眼差し。

その先にいるのは、あのお客様さん達。

何がなんだかわからないけど、恵美さんが仕事にならないことはわかった。

「わかりました」

あたしはため息をつくとき、お水とおしぼりを乗せたお盆を持って、テーブルに向かった。

「いらっしやいませ」

あたしは笑顔でお水を置いた。

皆が騒ぐ客とはどんな客なのか！
すつごく気になって、男たちをこっそりと観察してみた。

一人は、店の中だというのに、野球帽を目深にかぶったまま。
顔は見えない。

Tシャツにジーパンというラフな格好だ。
ジーパンを腰ばきしていて、いかにも若い男という印象。
もしかして、同じ年くらいかな？

もう一人は、茶髪にサングラス。
サングラスの色が黒に近くて、目が見えない。
当然、顔はわからないけど……イケメンな気はする。
顔の骨格や鼻、唇の雰囲気がかっこいいような……。

服装は白と薄青のストライプシャツに、黒のパンツ。
さっきの少年よりも落ち着いていて、こっちはたぶん大人の男だ。

そして、最後は……。

あたしは残った男も見て、呆れた。
この3人組、顔を隠さなきゃいけない理由でもあるわけ？

野球帽少年と茶髪男の向かいに座る金髪の、一番目立つ男。
ソイツもまた、暗い色のサングラスをかけていて、顔がわからない。

なんなの、コイツら……。
自分の笑顔がまた引きつってしまふ。

だってさ。
普通、お店の中では帽子もサングラスもとるでしょ！？

「店内では取りなさいよ!」って言ってやりたい気持ちを、必死にこらえる。

金髪男の服装は、黒のシャツにジーンパン。
ラフな格好のはずなのに、安っぽく感じないのはなんでだろう。
ブランド物のお高いジーンズだとか?

金髪男の髪の毛も、派手に染めてるわりには、綺麗。
髪の毛が傷んでない?

その辺のヤンキーの金髪とは違う気がする。

それにしても、この3人は何者なんだ…。
あたしはそればかり気になってまう。

皆が3人に注目した理由はよくわからないけど、なんか納得だよね。
オーラっていうのかな?
普通じゃないものを感じる。

顔が見えなくても、たぶん3人ともモテるイケメンで、華やかで。
あたしはそんな疑問を感じながらも、頭を仕事に切り替えた。

「ご注文はお決まりですか?」

「オレね、オムライスランチ!」

「はい、オムライス…」

「あっ」

野球帽の少年が言ったオーダーを繰り返そうとしたら、その少年自ら遮ってきた。

「やっぱりパスタランチも捨てがたいな。ハンバーグランチもいいな」

「おまえ、それ、全部だろ」

茶髪男のツツコミに笑いかけた。

この店のランチは3種類。

オムライス、サラダ、スープ、ドリンクのセットのオムライスランチ。

パスタ、パン、サラダ、スープ、ドリンクのセットのパスタランチ。
ハンバーグ、ライス、サラダ、スープ、ドリンクのセットのハン
バーグランチ。

つまり、少年はすべてのランチで迷ってることになる。
優柔不断な男だなあ。

「レンはよく食べるから、ハンバーグにしとけば？」

「一番、ボリリュームありそうだね」

金髪男、茶髪男の順に言った。

その言葉に、何かが引つかかった。

「……レン？」

思わず、つぶやいた。

すると、金髪男が初めてあたしを見た。

ゴクリと息を飲む。

な……何？

金髪男はなぜか、あたしを凝視していた。

サングラス越しに薄く見える瞳がこちらを見ている。
その視線を痛いほど感じる。

その時、野球帽の少年がわたしに向かって言った。

「……佐藤？」

「は、はい」

その拍子に、ようやく金髪男からの金縛りが解けた。

野球帽の少年が帽子をあげて、あたしを見ている。

その顔には見覚えがあった。

さっき感じた引っ掛かりってコレだったんだ。

「オレだよ、オレ！ 同じクラスの蓮条^{れんじょう}！」

そう言いながら野球帽を取った彼は、短い黒髪と二重の大きな瞳、まっすぐな眉で、はにかんだ笑顔を見せた。

彼はクラスメートの蓮条^{まこと} 真。

クラスでも真ではなく、レンって呼ばれていて、金髪男がレンと呼んだ名前にピンときたんだ。

「なんだ、蓮条だったの」

あたしは肩の力を抜いて、微笑んだ。

店内にいる多くの女性から熱い眼差し。

それらを受ける男たちの正体が気になっていたあたしは、その一人がクラスメートとわかって、理由もわかった。

だって、蓮条はただのクラスメートじゃない。

蓮条は――。

「何、何、レン。この店員さんと知り合いなの？」

茶髪男が興味津々という風で話しかけてきた。

サングラスをずらし、直にわたしを見てくる。

……やっぱり。

この人もイケメンだ。

あたしよりも5歳は年上の20代の男。

少年の雰囲気が残った、クルッとした愛嬌のある瞳だ。

蓮条は茶髪男に向かって頷いた。

「クラスメートなんです」

「へえ！ 仲いいの！？」

「そうですね。佐藤も演劇やってるから、わりと話す方かも」

「……ちよっと、蓮条！」

あたしは焦った。

何、人の秘密をポロリと言ってくれてるの……！？

たしかに、あたしは演劇をやってる。

でも、それは訳あって、誰にも内緒なんだ。

蓮条は、あたしが演劇を始めるキッカケに関わりがあって、知っているだけ。

そうでなければ、蓮条にだって言えない。

秘密は人に言った時点で秘密じゃなくなるから。

誰かに言ってしまったら、どこから誰に漏れるかわからない。

そんなわたしの複雑な思いには気づかないまま、茶髪男はキラキラと瞳を輝かした。

「佐藤さんも演劇してるの？ てことは、どっかの劇団か芸能事務所かに所属してるってコト！？」

その瞳を見ると、むげには扱えない何かを感じて、あたしは困った。

「…あ、あの！ オーダー！ わたし、仕事なので私語はちょっと……。オーダーをお願いします！」

「えっ、あ、えーとね……」

茶髪男はガツカリした表情で注文をした。

その表情に申し訳なく思いながらも、その後、料理を運ぶ以外でそのテーブルに近づかないように仕事をした。

夕方4時に仕事が終わり、あたしは裏口の扉を開けた瞬間、固まった。

なんで？

どうして……？

扉の向こうには、蓮条をはじめとする、あの3人組の男が立っていた。

ランチタイムの終わりにかけに入店した彼らだけど、さすがに1時間も経たずに席を立った。

それから、2〜3時間。

ずっと外で待ち伏せていたの！？

あたしが何時上がりかも知らないだろうに……。

裏口は店内からは見えないようになってるので、待たれているなんて、全く気づかなかった。

大通りではなく、人通りの少ない小さな道に面してるから、騒がれもしなかったのかもしれない。

「よかったー。わりとすぐに出てきて」
「え？」

茶髪男がにっこり笑って言ったことに、思わず、耳を疑った。
2〜3時間は待ったはずなのに、すぐにとって……一体、何時間待つ気だったって言うの。

呆然と茶髪男を見上げていたら、いきなり、ガシッと腕を捕まれた。
「えええ!？」
な、何……!!？

「もう少し話したいって思ってたんだ」
「は、話……!!？」
歩きだした茶髪男に引きずられるようにして、あたしは男に向かって問い返した。

もう……何なわけ？
急な展開に、頭がついていかない。

チラッと横を見ると、蓮条と目があった。
蓮条は片手を顔の前にやって、口パクで「ごめんね」と言ってる。

ご、ごめんねって……
謝るくらいなら、最初からこんなことしないでよー!!

と思うけども、そんなことも言えず。
あたしは最後の頼みの綱とばかりに、金髪男を振り返って見た。

だけど、金髪男は一瞬、あたしに視線を向けたかと思うと、後はすまし顔。

どうやら、あてにはできないらしい。

あたしはガツクリと肩を落とした。

運命の土曜日（後書き）

始めてみました。よろしくお願いします。

イケメンアクターズ1

15分後。

あたしは喫茶店で紅茶とにらめっこしていた。

決して、BUTTERFLYのような『カフェ』ではなく、昔ながらの喫茶店という呼び名がふさわしい雰囲気店内。

店内の見えない木の扉。窓には日差しを防ぐシェード。わずか3テーブルとカウンターしかなく、こじんまりと落ち着いている。

店員はマスターらしき年輩の男性のみ。

店内にお客さんはあたし達だけだった。

あたしの向かいには金髪男と茶髪男。隣には蓮条が座ってる。

彼らは3人とも、この店では顔を堂々と見せていた。しつこいようだけでも、きちんと見た顔は皆、想像以上にカッコイイ。

茶髪の方はさっき、チラッと顔を見た通りで。

金髪男の顔は彫りがすごく深かった。

無駄な肉のない細い顔だち。高い鼻。切れ長の二重の瞳。

その目力は強く、3人で一番目を引く。

蓮条も今更だけど、イケメンなんだよね。

茶髪男と金髪男と一緒にいても引けをとらない姿に、改めて実感した。

蓮条とは高校3年間同じクラスだけど、そのモチっぷりと言ったら半端ない。

クラスで1番はもちろんのこと。ヘタしたら、学年で1番。いや、学校で1番モテるのかもしれない。

友達が言うには、「ジャニーズ事務所のアイドル並」らしい。ジャニーズ事務所って言うのはよく知らないんだけど、男性アイドル事務所なんだって。

蓮条は華やかで、笑顔が絶えなくて、目を引くんだ。

だけど、それだけモテるわりには、誰からの告白もお断りで有名らしく、芸能人と噂になったこともない。

謎な男でもある。

……とコレも友達が言ってたこと。

あたしは単に、バレないようにうまくつき合ってるだけだと思うけどね。

そんな彼らに囲まれて、あたしは目のやり場に困っていた。

……落ち着かない。

せっかくの紅茶も減ることはなく、どんどん冷めていく。

勿体ないってわかってるけど、カップをつかむことすらためらう緊張感……を感じてるのは、もしかしてあたしだけ？

茶髪の人がリラックスした笑顔で話し出した。

「じゃ、改めて。おれは瀬田^{せだ} 順平^{じゅんぺい}。よろしく」

「佐藤麻里亜^{さとう まりあ}です。よろしくお願いします」

「俺は堀内^{ほりうち} 勇^{ゆう}だ。よろしく」

素っ気なく挨拶する堀内さんに、軽く頭を下げた。

「それで、麻里亜ちゃんも演劇やってるの？ レンと仲いいくらいだから、まさか部活レベルじゃないでしょ？」

「え、えと……」

いきなり直球の話題と、名字ではなく下の名前で呼ばれたことで、タジタジになった。

ど、どうしよう……。

今、ここで劇団の名前を言うことは簡単。

でも、もしも何かのキツカケでそれがあの人の耳に届いたら――。

怖い。怖すぎる。

怒った顔を想像して、血の気が引く思いだった。

きつと、怒った顔どころじゃない。

般若？

今までに見たこともない反応が返ってくることは間違いない。

「あ、あの――」

そのことは言えませんかと言おうとした時、堀内さんが口を開いた。

「劇団はぐれ鳥のシンデレラだろ」

その途端、蓮条は口を開いてぽかんと堀内さんを見た。

瀬田さんは「ええ！？」となにやら驚き、あたしは――。

自分が息をしてるのかさえ、わからなくなった。

なんで？

堀内さんはあたしのことを知ってるの……？

まるで、言葉にならなかった疑問が聞こえたかのタイミングで、堀内さんは言った。

「おまえが出た公演は見たことがある」

……。

「ええ!？」

一拍おいて、ようやくわたしの針が動き出した。

堀内さんに見られていたなんて、なんだか恥ずかしい……。

演じている時は恥ずかしさなんてなく、堂々と演じている。だけど、舞台を下りて、日常で見られたとわかれると、不思議と恥ずかしくなってくるんだ。

「ちえー。オレが言っ、驚かそうかと思ったのに」

「蓮条!」

あたしは蓮条を睨んだ。

そう簡単に人の秘密を暴露されてたまるか!

……まあ、すでに堀内さんという伏兵によって、暴露されちゃったわけだけど。

不意に視線を感じて、前に向きなおると、瀬田さんの瞳がまたキラキラ輝いていた。

……なにか、嫌な予感がする。

「はぐれ鳥のシンデレラって、あのシンデレラ!？」

瀬田さんは身を乗り出して、聞いてくる。あたしは逃げるように身を引いた。

「え、あの……」

「そうだから、落ち着け」

堀内さんが瀬田さんの背中の服をつかんで、引っ張った。

「あ、あの! シンデレラってなんのコトですか!？」

あたしは思い切って聞いた。

自分の所属する劇団を当てられて驚いたわけだけど、シンデレラという呼び名には心あたりがない。

皆の反応から察すると、シンデレラⅡすごい人みたいだから、誰かと勘違いしてない？

「おまえは夏休みや冬休み、長期の休みにしか出演しないだろう？」

「あ、はい」

堀内さんの言葉に、あたしは頷いた。

だって、お母さんには絶対に内緒の演劇。

学校を休めないんだ。

普段は出れないって我が儘を許してくれてる団長やメンバーの皆には感謝してる。

「休みが明けたら消えてしまう姿が、まるで0時になったら帰ってしまうシンデレラのようにだって、おまえのことをはぐれ鳥のシンデレラと呼んでるんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044y/>

リアル★スター

2011年11月29日17時53分発行